静岡文化芸術大学図書館・情報センターの学習支援の可能性を考える

林　　左和子

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷
第10巻　2010年 3 月

静岡文化芸術大学図書館・情報センターの学習支援の可能性を考える

Feasibility for learning support of the Library of SUAC

林　左和子
文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

図書館の学習支援の可能性を考えるためには、まず学生は図書館をどのように利用しており、どのような問題を感じているのかを明らかにさせる必要があると考えた。このため、授業で図書館を利用して調べる課題を与え、それについてのアンケート調査を行った。この調査の結果に基づいて、学生の図書館利用の現状と問題点をまとめ、考察した学習支援の可能性について述べる。

It is necessary that studentsÉÜ pattern and problem of library use become clear. Then a questionnaires survey of student was conducted. This paper describes the result of the questionnaires surveyÅ@andÅ@possibilities of learning support of the Library of SUAC.

1．はじめに

大学図書館を活用させる授業の効果として、以下の6点が指摘されている[i]。第一に、情報を探し出し、評価し、効果的に利用する方法を学習することは、卒業後の実社会で必要となる情報探索に役立つ。第二に、問題を組み立て、問題に関連する情報を探し出し、収集した情報を整理し、その情報に基づいて行動に移る、という能動的な学習体験をする事が可能となる。第三に、個別に課題に取り組ませることで、それぞれの学生の能力に応じた学習が可能となる。第四に、個別的な学習に向いている学生とグループ学習に向いている学生それぞれに対応する授業スタイルが可能となる。第五に、継続・発展的な学習が可能となる。第六に、学生自身に課題や達成点を設定させることで、主体的に取り組ませることができる。

この6点は、現在全国の大学で進められているFD(ファカルティ・デベロップメント)・授業改善に共通する要素が多い。大学図書館を活用させる授業をおこなうことが、FDにつながるといえる。FDとの関わりで大学図書館の学生支援(学習支援)の事例も報告されている。[ii]静岡文化芸術大学(以下本学とする)図書館・情報センターでも、FDと関連した取り組みを行うことができないだろうか。この点を考えるため、まず学生の図書館利用の現状や授業で図書館を活用させるにあたって、どのような問題点があるかを把握することとした。方法としては、2008年度後期の「地域情報サービス論」の中で学生に図書館を活用して調べる課題を与え、アンケートで学生の状況を把握することにした。そのデータに基づき、SUAC図書館・情報センターの学生支援の可能性について論じた。

2．「地域情報サービス論」の概要とアンケート調査方法

「地域情報サービス論」は、文化政策学部共通科目(区分「情報リテラシー」)でありかつ司書課程科目(「図書館サービス論」)でもあるため、公共図書館サービスの歴史と可能性に関する内容となっている。2年次対象科目であるが、3年次になってから履修するものも多い。2008年度の場合、登録者数は150人であった。

図書館を使って調べる課題は3点与えた。課題1は、アンドリュー・カーネギーと図書館の関わりについて、資料を指定して調べさせた。なお学生数150人に対して資料が6点と少なかったため、期間を長めに設定するとともに、図書館に依頼して指定した資料は貸出停止措置をとってもらった。ただし指定図書として一箇所に集めることはせず、請求記号を手掛かりに書架上で探させるようにした。課題2は、授業で紹介した小説『ブラックボーイ』の著者リチャード・ライトの略歴を調べることである。この時は、特に資料は指定せず、参考図書を探して調べるように指示した。課題3(まとめ課題)は、地域の課題を解決する図書館というテーマで、各自が自分の住む自治体の課題と図書館で課題解決のためにどのようなサービスが可能かを考えるものであった。対象とする自治体や図書館について、インターネットを利用して情報を収集するとともに、自分が考えた図書館サービスをすでに行っている図書館の事例を図書や雑誌論文で探すことを義務づけた。

アンケートは、課題を提出した最終日に行った。課題提出者が135人で、アンケートのうち有効回答は89件であった。

3．アンケート調査結果

3-1　学生の図書館活用の現状

まず、この学期中(2008年10月～2009年2月)の図書館利用状況、利用目的、実際の利用内容をたずねたところ、表1～2の結果となった。利用回数は週1～2回がもっとも多く次いで週3回以上であり、ほとんどの学生が「レポートなどのため」を利用目的としている。しかし表3で利用内容を見ると、「メディアステーションで課題を作成」が74%ともっと多く次いで「図書館の本を借りる」が60%である。一方で、「百科事典などで調べる」は30%、「新聞、雑誌記事を探す」は5.6%と、調べること

を目的とした利用が少ない。利用目的で「ゼミ・卒論のため」を選んだ3年生30人に限定しても、同様の傾向がみられる。

このデータから、本学の学生は、「レポートなどのため」に図書館をよく利用しているが、その内容は図書を借りることやメディアステーションでの課題作成が中心であり、調べることを目的とした利用は少ないといえる。

3-2　課題について

指定された図書で調べる課題1と自分で事典類を探して調べる課題2についての調査結果を示したのが表4である。「資料をすぐ見つけることができた」が最も多いのは共通しているが、課題1が61%であるのに対して課題2では49%になっている。一方で、「資料をさがすのが大変だった」との回答は課題1が17%で、課題2では27%になった。テーマに即した資料(この場合は参考図書)を探すことが難しいと感じている学生が少なくないようである。なお「配架場所はすぐわかったがその場所にないことが多かった」は学生数が多いため、特定の資料を同時に調べようとして資料が見つからないケースを想定した問いである。表5は、図書や雑誌論文を探す課題3(最終課題)で、難しかったことを3点まで選ばせた結果である。

「図書、雑誌論文の探索」と「図書、雑誌論文の入手」がいずれも60%である。表4、表5の結果から、学生が調べる内容に適した専門事典や図書、雑誌論文の探索を苦手としていることがうかがえる。

3-3　情報探索の経験

表6は、これまでの情報探索の経験(図書検索、雑誌論文検索)についてたずねた結果である。どの学科、学年においても「経験がある」の回答件数が「経験がない」を大幅に上まわっており、この時点までで情報探索方法について学んできていることがわかる。本学では、文化政策学部共通科目の「図書館概論」「情報検索」「学術情報論」で情報探索を学習する機会がある。また、学科別では国際文化学科の「国際文化基礎演習」「購読演習」や文化政策学科の「文化政策基礎論」でも学習している。「経験がある」と回答した学生に、どのように機会に情報探索を行ったかを書いてもらった中にこういった科目名があがっている。

経験はしているものの、3-2で見たように図書や雑誌論文の探索と入手を難しいと感じている学生が多い理由としては、テーマによって情報の探し方に工夫をしなければならないという個別性や、経験してはいるが身についていない、などが考えられる。アンケート最後の自由記述の中に、「ツールを使いこなせていない自分を強く感じた」という回答があった。他の技術同様、繰り返し使うことで身についていくものであろう。

ここまでの結果から以下の2点のことが明らかになった。第一には、本学の学生は図書館を比較的よく利用しているが、その利用はメディアステーションでの課題の作成、図書の貸し出しが中心であり、「調べる」ことを目的とした利用は少ないことである。第二に、指定された図書を書架上で探すことは問題ないものの、目的に合わせて適切な参考図書、図書、雑誌の探索や入手は難しいと感じている学生が多いことである。一方で、授業などで、図書や雑誌論文を探した経験をもっている学生は多い。つまり、探索方法を一通り学んでいるものの、それが実際に使いこ

表1

質問	ほぼ毎日	週三回以上	週一～二回	月数回以上	月一～二回	利用しない
回答数	9	28	35	12	4	0

表2

質問	レポートなど	ゼミ・卒論	自主学習	知識・教養	趣味・娯楽	その他
回答数	87	20	8	11	17	3

表3

利用方法	全体	ゼミ・卒論のため
回答数	89	20
1. 図書を読む	23(25%)	10(50%)
2. 図書を借りる	54(51%)	17(85%)
3. 図書のコピー	9(10%)	2(10%)
4. 新聞・雑誌を読む	5(5%)	2(10%)
5. 新聞・雑誌記事の検索	5(5%)	2(10%)
6. 百科事典などで調べる	27(30%)	3(15%)
7. インターネットにアクセス	37(41%)	9(45%)
8. メディアステーションで課題作成	66(74%)	15(75%)
9. 自習場所	23(25%)	3(15%)

表4

設問	課題1	課題2
1. 資料をすぐ見つけて調べることができた。	54(61%)	42(49%)
2. 資料の配架場所はすぐわかったが、所定の場所にないことが多かった。	18(20%)	13(15%)
3. 資料を探すのが大変だった。	15(17%)	27(31%)
4. その他	1(1%)	3(3%)

表5

設問	回答数
1. 自治体についての調査	17(20%)
2. 図書、雑誌記事の探索	54(60%)
3. 図書、雑誌記事の入手	53(60%)
4. 関連する機関、団体の調査	32(35%)
5. 調べている図書館サイトから必要な情報を見つける	32(35%)
6. その他	1(1%)

なせるまでになっていないと考えられる。こういった状況を改善するために、以下の 2 つの方法を提案したい。

4．学生に図書館を活用させる方法

4-1 授業での取り組み

情報探索の基本は学んでいるととはいえ、図書館で調べる学習方法が十分に身についているとはいえない。調べさせるための何らかの仕組みをつくることが必要であろう。

そのためには、授業内で、図書館を活用させる課題を出すことが効果的と考えられる。図書館のオリエンテーションや情報リテラシー科目では、どうしても情報探索技術を身につけること自体が目的となってしまい、その必要性を学生が実感しにくいのではないか。授業に即した課題で、情報を探し、読み(分析し)、まとめる体験を通して、情報探索の必要性を認識することができる。

また多くの技術同様、情報探索も繰り返し行うことで能力を向上させることができる。複数の授業で取り組むことで、卒業時には社会で役に立つ応用力を身につけることができるのではないか。

授業で課題を出すにあたっては、図書館との協力体制を事前につくっておくとよい。

まず、調べる課題を出す 1 ヶ月ほど前に、担当教員と図書館員で話しあう機会をつくる。この段階で、調べさせるテーマとそのために図書館が提供できる資料や情報の存在と数が明らかになる。もし不充分な場合は、役立ちそうな資料の購入手続きをとることも考えられる。こういった場合の特別購入枠を設けておくと迅速に対応できる。打ち合わせなどの時間の問題があるか、非常勤講師にも可能性を開いておくことが望ましい。もし用意できる資料数に限りがある場合は、一定期間の貸出停止措置をとることで多くの学生に利用させることは可能である。

図書館員がどこまで手伝ったらよいのか(どこまでは学生に努力させたいと考えているか)の打ち合せも必要であろう。場合によっては、調べる際の手引き書になる「パスファインダー」を用意し、できる限り学生自身で調べることができるようにしておくことも考えられる。

必要があれば、課題を与える日の授業の中で、図書館員に調べ方を指導をしてもらうこともできる。ただしあくまでも課題を与える時であることが重要である。学期当初など、学生が課題を意識していない段階での説明は、記憶に残りにくい。

表 6

		WebcatPlusで特定分野の図書を探した経験		CiNiiもしくは国立国会図書館雑誌記事索引で雑誌記事を探した経験	
	学年	ある	ない	ある	ない
国際文化学科	2	19(60%)	13(40%)	23(72%)	9(28%)
	3	11(79%)	3(21%)	11(79%)	3(21%)
文化政策学科	2	24(82%)	5(18%)	22(76%)	7(24%)
	3	3(100%)	0	2(66%)	1(33%)
芸術文化学科	2	8(73%)	3(27%)	8(73%)	3(23%)

4-2 図書館の整備

授業で課題を与えることで、調べなければならない状況に学生を置くことができる。ただ、すでに見てきたように、学生は調べるための情報源(インターネット情報源を含め)を探す段階で困難さを感じている。これに対応できるのが、図書館員のサポート、いわゆるレファレンスサービスである。

教員の指導だけでなく、図書館員のサポートが必要と考える理由は 2 点ある。第一に、あくまでも学生に主体的に取り組ませることが重要であり、サポートは探索に行き詰まった場合に、それぞれの状況に合わせて提供されなければならない。教員は常時図書館にいるわけではないので、困った時にすぐ相談できるとは限らない。また「正解」となる資料をすぐ提供するのではなく、いろいろな資料をその使い方を説明しながら調べさせていく、ことが好ましいが、これは研究室やメールでのやりとりでは限界がある。図書館員であれば、すぐ相談でき、図書館内を一緒に歩き回り、あるいは資料を手にとって見ながら説明することができる。

第二に卒業後に必要となる情報探索の場合を考えた時、常に教員に助けを求められるわけではない。しかし、図書館員に助けを求められることを知っていれば、地元の公共図書館などに相談ができる。

しかし、レファレンスサービスの存在が学生に知られているとはいえない。アンケートの自由記述の中に、「レファレンスサービスは今まで受けたことがなかったが、今後卒論作成などにより専門的文献を探すとき、お世話になると思う。しかしカウンターが時々無人であったり、レファレンスサービスについての案内表示がないため、何となくたずねにくい雰囲気で気軽に利用できるか少し心配」という回答があった。学生が相談しやすい環境をつくることが望まれる。

また現在の情報探索では、印刷資料とインターネットの両方を利用することが必要であろう。そのためには、PC を使いながら、図書も調べられる環境があることが望ましい。

さらに、授業によっては、個人で取り組む場合だけでなく、グループで調べる課題に取り組むことも考えられる。

この3点に対応できるものとして最近注目されているのが、「ラーニング・コモンズ」である。「ラーニング・コモンズ」(インフォメーション・コモンズともよばれている)は、1990 年代に合衆国の大学図書館で、「場としての図書館」の意義を考える中で生まれてきた試みである。大学によってその形は多少異なっているが、「学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信する学習活動全般を支援するための施設とサービスの提供」[iii] である点は共通している。また「最も重要なのは人的支援がある点であろう。同じフロアには、資料調査で行き詰まった学生の相談を受けるレファレンスカウンターが設置され、機器類の使い方を指導してくれる技術支援スタッフも常駐」[iv] とあるように、専門のスタッフ(図書館員)のサポートを受けられる場所でもある。日本では、お茶の水女子大学図書館が図書館改革の一つとして導入しその成果が報告されている[v]。大阪大学附属図書館など新たに設置した大学図書館や取り組みの検討をはじめた大学がある。

5. まとめ

大学図書館を使って調べる学習習慣を学生に身につけさせるためには、授業を計画する教員と図書館員の協力体制が必要である。同時に、図書館の整備や図書館員の配置により、学生が来館したくなる場所、そこにいけばサポートを受けられる場所という認識を学生にもってもらえるようにすることも必要であろう。

[本研究は、平成20年度学長特別研究「新しい学習環境の研究」の一環として進められたものであることを付記しておく。]

注・引用文献

i　ブレイビク，パトリシア・セン，ギー，E. ゴードン　三浦逸雄ほか訳『情報を使う力　大学と図書館の改革』勁草書房　1995 p.41-43

ii　例えば、金丸明彦他「長崎大学におけるファカルティ・デベロップメント　プログラム」『大学図書館研究』69(2003.12) p.1-14、長澤多代「アラーム・カレッジの図書館が実施する学習教育支援に関するケース・スタディ」Library and Information Science 57(2007) p.33-50 、原真由美他「横浜女子短期大学図書館における学習支援の試み」『横浜女子短期大学紀要』23(2008) p.99-124 などがある。

iii　米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」 カレントアウェアネス 287(2006) p.9-12

iv　井上真琴「「学びのマネジメント」を支援する」『IDE 現代の高等教育』No.510(2009年5月号)　p.12

v　茂出木理子「学習と図書館改革　お茶の水女子大学」『IDE 現代の高等教育』No.510(2009年5月号)p.27